

カワイ出版刊「交響曲 第九番 第4楽章・合唱」より転載

文化フォーラム春日井開館記念

'99春日井市民第九演奏会

とき 1999.12.5 SUN 午後3時開演 春日井市民会館

主催 春日井市、春日井市教育委員会、'99春日井市民第九演奏会実行委員会

共催 春日井市交響楽団、春日井第九合唱団

後援 中部大学、中日新聞本社

ごあいさつ



春日井市長 鵜飼 一郎

本日は、「'99春日井市民第九演奏会」によるこそお越しくございました。

今年もまた第九の調べを聴く季節となりました。恒例となりました「春日井の第九」も今年で7回目を迎えます。

平成5年に市制50周年を契機として始まりました「春日井の第九」は、合唱から管弦楽までのほとんどを市民が担い、しかも、質の高い演奏を目指し、毎年着実な歩みを続けておられます。今日にいたるまでの、春日井第九合唱団と春日井市交響楽団の皆さん、さらには関係の皆さんの多大なるご尽力と熱意に心から敬意を表します。

本市では「個性ある文化と豊かな情操を育むまちづくり」をテーマに、文化の香り高いまちづくりを進めておりますが、こうした市民の皆さんによる積極的な文化活動は、文化都市・春日井を育ててゆく大きな活力になると確信いたしております。

さて、毎年新鮮な企画で私たちを楽しませてくれる市民第九ですが、今年は、指揮者にドイツから新進気鋭のダニエル・H・カヴァッツァ氏、ソリストには国内外で活躍著しい皆さんをお迎えし、若々しくも厚みのある演奏が期待されます。この方々との共演に情熱を燃やしている春日井第九合唱団と春日井市交響楽団もきっと素晴らしい演奏で私たちに感動を与えてくれることでしょう。

今年も残すところわずかとなりました。師走のひととき、「第九」の調べを聴きながら、この一年を振り返り、新たな年に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。



'99春日井市民第九演奏会実行委員会会長
中部大学総長 山田 和夫

春日井市恒例の「春日井市民第九演奏会」によるこそおいでございました。

恒例とはいえ、例年の第九の会場でありますこの市民会館も、まわりの環境は大きく変わりました。ご覧のとおり、会館前に文化フォーラム春日井の偉容がそびえ立っています。これで、市民の生活と安全を守る「市庁舎」と春日井文化の殿堂「市民会館」と市民の文化の創造と想像を司る「文化フォーラム春日井」という黄金のトライアングルが完成しました。互いに肩を寄せあうこの三つの建物が、相互に響き合いながら、私たちの生活と文化をより豊かなものにしていきます。

本日の「春日井市民第九」にも、この黄金のトライアングルがあります。それは、「作曲家」と「演奏者」と「聴衆」のみなさまとが創り出す三角形です。この二組の三角形は、お互いに相似形をなしています。市庁舎は新しい夢を企画・立案・構成する作曲家であり、市民会館はそれを制作・実現する演奏者であり、文化フォーラム春日井は現実を評価し賛同しながら新しい夢を希求する聴衆です。私たちが春日井市民の歌う第九を聴くとき、三つの建造物が、春日井文化を生み出す「文明」として正しく機能していることに気がつくでしょう。

今年もまたウィーンから若き指揮者をお招きしました。ウィーンで音楽を学んだダニエル・ホーイェム・カヴァッツァさんは、現在はアルプスに近いクラゲンフルト歌劇場の常任で、たくさんのお新演出のオペラに挑戦している新進気鋭の逸材です。格調高く表現力豊かな音楽が期待されます。ソリストは、おなじみの稲垣俊也さんを中心に、いま最も人気と実力を誇る小林史子・小川明子・小山陽二郎のみなさまにおいでいただきました。それに、春日井市民ご自慢の春日井第九合唱団と春日井市交響楽団が加わって、みなさまにまた新たな感動を与えることでしょう。では、ごゆっくりお楽しみ下さい。

プログラム

Program

ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン作曲
LUDWIG VAN BEETHOVEN(1770-1827)

交響曲第9番 二短調 作品125「合唱つき」 Symphony No.9 in d-minor op.125 "Choral"

- 第1楽章 アレグロ マ ノントロッポ, ウン ポコ マエストーソ
1 mov. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
- 第2楽章 モルト ヴィヴァーチェ
2 mov. Molto vivace
- 第3楽章 アダージョ モルト エ カンタービレ
3 mov. Adagio molt e cantabile
- 第4楽章 フィナーレ, プレスト - アレグロ アッサイ - レシタチーボ - アレグロ アッサイ
4 mov. Finale, Presto - Allegro assai - Rezitativo - Allegro assai

指揮者
Conductor

ダニエル・ホーイェム・カヴァッツァ
Daniel Hoyem-Cavazza



ソプラノ Soprano

小林 史子

アルト Alto

小川 明子

テノール Tenor

小山 陽二郎

バス Bass

稲垣 俊也



音楽監督 都築正道
Music director

合奏指導 加藤莞二
Sub conductor

合唱指揮 吉川 朗
Chorus conductor

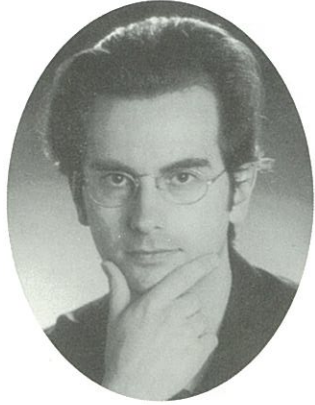


管弦楽 春日井市交響楽団
KASUGAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA



合唱 春日井第九合唱団
KASUGAI CHORUS OF THE 9TH SYMPHONY

出演者紹介



指揮者 ダニエル・ホーイェム・カヴァッツァ

ドイツ キールで生まれる。ウィーン国立音楽大学で、指揮法をカール・エスタライヒャー、コレペティツィオンをハラルド・ゲルツ各教授に師事。1993年に優秀な成績で卒業。卒業後すぐ、オーストリア クラーゲンフルト市立歌劇場に指揮者兼コレペティータとして契約する。1997年には、ウィーン フォルクスオーパーにて、ベッリーニのオペラ「ノルマ」の新演出をしたとき、音楽監督アッシャー・フィッシュ氏のアシスタントを務める。フォルクスオーパーでの指揮デビューは、モーツァルトのオペラ「魔笛」。1999年から、クラーゲンフルト市立歌劇場の常任第2指揮者となる。カヴァッツァがオペラやコンサートで共演したオーケストラは、ケルントナー・シンフォニーオーケストラ、アンサンブル・クレアティーフ、ニュルンベルク・フィルハーモニカ、J.S.バッハ室内オーケストラ、ウィーン・フォルクスオーパーオーケストラなど。また、エアフルト(ドイツ)、ドレスデン、ストックホルム、オデッサ、コペンハーゲン等の音楽祭に客演している。初来日。



ソプラノ 小林 史子

松坂女子高等学校音楽科卒業。愛知県立芸術大学音楽学部声楽科卒業(桑原賞受賞)。同大学院修了。ロータリー財団奨学生としてイタリアに留学、ヴェルディ音楽院卒業。ソロリサイタル(1983年・1986年・1991年・1993年・1995年・1996年)オペラ「リゴレット」(ジルダ)、ラ・ボエーム(ミミ)、「ヘンゼルとグレーテル」(眠りの精・ゲルトルート(母親))、「斎王」(多比良古)、「フィガロの結婚」(伯爵夫人ロジーナ・スザンナ)、「修道女アンジェリカ」(アンジェリカ)に出演。宗教曲ヘンデル「メサイア」、ヴェルディ「レクイエム」、モーツァルト「レクイエム」、戴冠ミサ、サリエリ「レクイエム」、フォーレ「レクイエム」、ラター「レクイエム」、ベルゴレージ「スターバト・マーテル」、プーランク「グローリア」、ベートーヴェン「第九」等にソリストとして出演。フランス音楽コンクール第1位。F.P.Neglia国際音楽コンクール第3位。ヴィオッティ国際音楽コンクール入選。後藤むつみ、稲葉祐三、神田幸子、中村浩子、R.Ricci、A.M.Castiglioni、沖野真理子、神田詩朗の各氏に師事。現在、三重高等学校音楽科、愛知教育大学非常勤講師。



アルト 小川 明子

東京芸術大学卒業、同大学院修了。文化庁オペラ研修所第10期修了。1997年度文化庁芸術家在外派遣研修員としてウィーンに留学。1992年第61回日本音楽コンクール声楽(歌曲)部門第2位。第4回日本声楽コンクール第3位。1993年第4回日本歌曲コンクール第1位ならびに山田耕作賞受賞。第10回ニッカ・カルメンシータ新人オーディション第2位。芸大在学中に第38回及び41回メサイア特別演奏会、芸大定期バッハ「マタイ受難曲」に出演。バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「クリスマス・オラトリオ」「マニフィカト」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「レクイエム」、ハイドン、シューベルト、ブルックナー、ヤナーチェク、ストラヴィンスキー等の宗教曲、ベートーヴェン第9番交響曲、モーツァルト「コシ・ファン・トゥッテ」「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」、原嘉壽子「祝い歌が流れる夜に」、ラヴェル「子供と魔法」、ヴェルディ「ファルスタッフ」、ニコライ「ウインザーの陽気な女房たち」、シェーンベルク「モーゼとアロン」、フンパーディンク「ヘンゼルとグレーテル」、ヒンデミット「ロング・クリスマス・ディナー」、水野修孝「天守物語」等のオペラに出演。高橋啓三、渡邊高之助、戸田敏子、毛利準、アデレ・ハースの各師に師事。二期会会員。



テノール 小山 陽二郎

愛知県立芸術大学卒業、同大学院及び研修生修了。愛知県新進芸術家海外研修助成を受けミラノに留学。カシナ・リリカ国際声楽コンクール第2位、ブダペスト国際声楽コンクール第2位、R.ブローズ歌曲コンクール第2位等、数多く入賞。95年愛知県芸術劇場にて「愛の妙薬」でオペラ・デビュー。翌



バス 稲垣 俊也

二期会「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロールをはじめ、都響「ファウストの劫罰」のメフィストフェレス(CD好評発売中)読響「アイーダ」エジプト王等数多くの作品で活躍。とりわけ97年国立劇場オープニング公演「タケル」の主役を好演し、たいへんな注目を集めた。98年には「カルメン」のエスカミーリオで再び国立劇場の舞台に立つ。第3回グローバル東教子賞。第22回ジローオペラ新人賞受賞。伊藤巨行氏、アルド・プロッチェ氏に師事。NHKニューイヤーオペラコンサート、FMリサイタル、NHK「堂々日本史」のテーマ曲を歌うなど放送分野においても活躍中。東京音楽大学、東京基督教大学神学部兼任講師。二期会会員。

年指揮者のB.リガッチ氏に招かれオルヴィエート市での「セヴィリアの理髪師」に出演、好評を博す。以後イタリアを中心に上記作品の他、「リゴレット」「ドン・バスカール」「コシ・ファン・トゥッテ」「友人フリッツ」「アルジェのイタリア女」「バステリアンとバステイエンヌ」等オペラ出演のかたわら多くのコンサートに出演。97年日生劇場の「魔笛」では気品ある王子役と評価される。その後ハンガリー国立歌劇場メンバーとなり「ファルスタッフ」「ラ・チェネレントラ」「ルチア」(アルトゥーロ役)に出演。ルーマニア、コンスタンツァ・オペラフェスティバルでの「リゴレット」でも成功を収めている。神田詩朗、岡山広幸、L.アルヴァ、V.テッラーノヴァの各氏に師事。藤原歌劇団準団員。



音楽監督 都築 正道

1940年名古屋生まれ。名古屋大学文学部美学卒。関西学院大学大学院博士課程修了。「ワグナー研究」で文学博士。現在、中部大学教授。春日井市交響楽団音楽監督。愛環音楽連盟理事長。朝日新聞音楽評担当。春日井文化フォーラム・企画運営アドバイザー。春日井文化懇話会会長。「オペラ・トーク」「ハイビジョン・オペラ・シアター」など、講演会やTVや雑誌でオペラの解説。「名古屋オペラ・サロン」主宰。主著「楽劇：音と言葉の美学」(音楽之友社)。



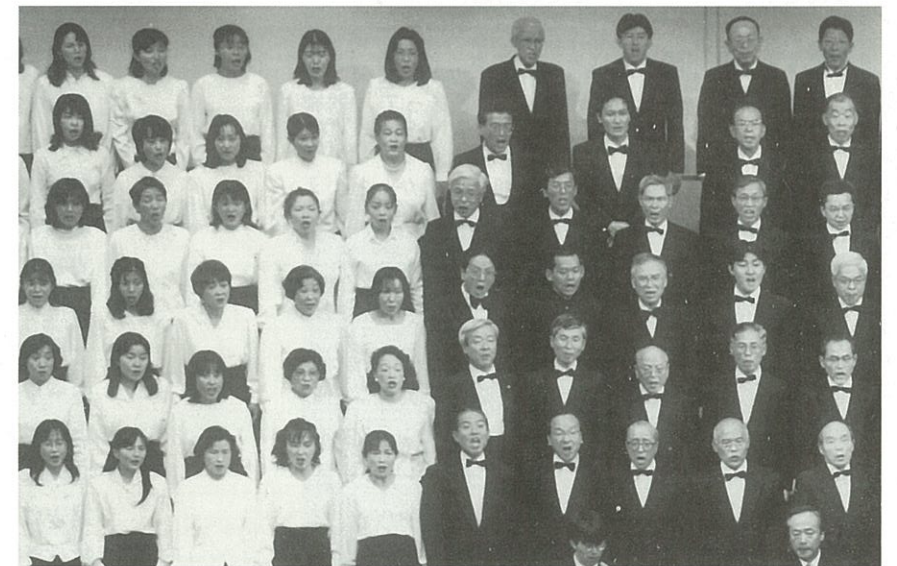
オーケストラ 春日井市交響楽団

平成2年11月、春日井市初のアマチュアオーケストラとして誕生。翌年創立記念演奏会を開催。以後毎年、春日井市民会館の満席の聴衆の前で定期演奏会を開き、今年7月の第8回定演でも、チャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」などを演奏して成功を納める。名誉会長の鶴岡一郎春日井市長、会長の山田和夫中部大学総長、団長の花村浩克を中心とした約60名の団員が、春日井市の音楽文化の原動力となるべく日々研鑽を積んでいる。昨年6月の「桑名菖蒲コンサート」(桑名市)・同9月の「第1回愛環音楽祭」(瀬戸市)など、他都市にまで活動の場を広げて「音楽大使としての市民オケ」の役割を果たしている。また先の(社)春日井建設協会主催の「菊華コンサート」では、フルーティストの山形由美と共演して好評を博す。今回の「春日井市民第九演奏会」でも新進気鋭の指揮者ダニエル・H・カヴァッツァ氏との共演に情熱を燃やしている。



合唱指揮 吉川 朗

愛知教育大学音楽科卒業。同大学院(作曲)修了。あけぼの合唱団、大高北PTAコーラスを始め、名古屋オペラ協会、愛知県文化振興事業団などのオペラの正指揮、副指揮を務める。名古屋芸術大学音楽部オペラ研究室実技補助員。大垣女子短期大学非常勤講師。



合唱 春日井第九合唱団

平成5年12月の春日井市制50周年記念「第九演奏会」に出演した春日井市民を中心に結成された合唱団。それ以降、毎年12月に開かれる春日井市民第九演奏会に、200名の大合唱団として出演。創立以来、ベテランの指導者吉川朗先生の熱心な指導に加えて、団長の荒川昭代とそれを支えるスタッフの優れたリーダーシップが、経験豊かな団員を勇気づけ、心のこもった質の高い演奏を生みつけている。昨年9月の「第1回愛環音楽祭」(瀬戸)を受けて、来年3月の「第2回愛環音楽祭」(春日井)にも出演予定。数多くの積極的な合唱活動によって春日井の音楽文化の中心となるべく努力をつづけている。

ピアノ伴奏(合唱団) 竹内 理恵



この世で見つけた幸せ

— ベートーヴェンからのメッセージ —

異端の交響曲 ベートーヴェン(1770-1827)の「第九交響曲」(1824)は、終楽章に4人のソリストと合唱が入った異端の交響曲です。「なぜ異端か」と言えば、「シンフォニー」(交響曲)は、もともとオペラを演奏するとき開演前にオーケストラが行う「音合わせ」(sym=合わせる・fonia=音)であって、器楽曲のための音楽に限定されていたからです。それなのに「なぜ交響曲の終楽章に声楽を加えたのか」といえば、この「第九番」が彼の最後の交響曲であり、その終楽章は彼の一連の交響曲の最終楽章でもあるからです。音楽史を少しのぞいただけでも、最後の交響曲の最後の楽章が、結果的にそうなったとしても、その作曲家の従来の交響曲の構成とは全く違った異質なものである例は意外に多いのです。ブラームスの「第四番」の終楽章(パッサカリア)、ブルックナーの「第九番」の終楽章(は完成されなかったので「テ・デウム」)、チャイコフスキーの「悲愴」の終楽章(アダージョ・ラメントーソ)、マーラーの「第九番」の終楽章(アダージョ=フィナーレ)と並べれば、単なる偶然であるとしても、少々気になるところです。たとえ無意識であっても、交響曲の絶筆となることを予感した作曲家が、その最後の作品の最後の楽章だけ、極めて前例のない破格なものに仕上げたことは、私たちになにか特別な、例えばフロイト的な感慨をもたらします。そ

れは、ひょっとすると、後世の私たちに向けられた作曲家からの直接の「遺言」(マニフェスト)なのではなからうかと思えるからです。

もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おう 特に、このベートーヴェンの「第九番」の終楽章こそ、正にベートーヴェンから私たちへ届けられた「メッセージ」であるといっていいでしょう。例えば、その良い例として、終楽章の長い序奏のあと、テキストとして用いられたシラーの詩が歌いだされる前に、バリトン・ソロがまるで宣言文を読むように朗唱する箇所が挙げられます。「おおわが仲間たちよ、このような調べではなく、もっと心楽しく喜びにみちた調べを歌おうではないか」と訴えるこの冒頭での呼びかけは、シラーの詩を始める前にベートーヴェン自身が書き記した序詞です。この個人的な発言は、言葉を持つ終楽章がベートーヴェンの「マニフェスト」(宣言文)であることをはっきりと現わしているといえましょう。

シラーの『歓喜の歌』 ベートーヴェンが最後の交響曲の最後の楽章にテキストとして用いたのは、8節からなるシラーの詩『歓喜に寄せる頌歌(しょうか)』なのですが、その中から人類愛を力強く賛えた詩句を自由に抜粋して再構成したものです。しかし、ベートーヴェンは、この「第九交響曲」の完成に先立つ31年も前に、一度、シラーのこの詩に作曲をしようと試みたことがありました。1792年(22歳)、その時彼はボン大学の聴講生でした。シラーの詩の初版時の9節全部に歌を付け、通作歌曲として独立した合唱曲にしようと考えていたようです。しかし、「命名祝日」序曲(作品115)にこの合唱曲の流用を思いついたものの、結局、『歓喜に寄せる頌歌』の音楽化の企ては実現しませんでした。

難解な現代詩と前衛音楽 その後も長い間、ベートーヴェンがこだわり続けてきたシラーの詩は、やっとのことで最後の交響曲に生を受けることとなります。1824年5月7日ケルトナートーア劇場で初演されたときには、それが時代をはるかに先取りしていたために、すべての人から理解され祝福された誕生とはなりません。当時の人々にとってこの詩は、大衆になじみ深い宗教詩でも聖句でも古典詩でもない、彼らと同時代の詩人フリードリヒ・シラー(1759-1805)の啓蒙思想やフリーメイソンの信念を語る現代詩でありました。このことが、当時のウィーンの人々に、この曲を「難解」なものと感じさせた原因のひとつでもあります。しかし、それ以上に彼らが強い戸惑いを覚

えたのは、絶対音楽である交響曲に声楽を加えたベートーヴェンの前衛的な音楽技法でした。ベートーヴェン自身も、「この試みは単なる暴挙にすぎず、完全に間違いであって、いつか純粋音楽の終楽章を書こう」と弟子のツェルニーに語ったということです。

歓喜は神々の火花である しかし、ベートーヴェンが、この暴挙をどれほど真剣に反省していたかは疑問です。結局、この改作案は実現されずに終わりました。私は、このエピソードにもかかわらず、「ベートーヴェンは、最後の交響曲が理解されないままに終わることを恐れず、あくまでも言葉によるメッセージの必要性を主張し、最後までその主張を放棄しなかったのだ」と思います。この曲には何か、人間として、作曲家として、社会に対して果さねばならぬベートーヴェンの「義務の念」といったものが強く感じられるからです。ここで私たちは、次の挿話を思い出します。ある人が、作曲家のシェーンベルクに訊ねました。「どういふ訳でベートーヴェンは、「第九交響曲」を乱雑だといわれながらも、書きつづけたのですか」。彼は答えました。「答は一つしか知らない。言わねばならぬことがあったからだ」。正にその通りで、彼には言わねばならぬことがあったのです。冒頭の1節「歓喜は神々の火花である」がそれです。ここでの「歓喜」は、私たちが日ごろ思っているような、食べたり飲んだり遊んだり「快楽」や「欲望」の結果としての「歓喜」のことではありません。詩をよく読んで見ると、「欲望はウジ虫にくれてやれ」という一節もあり、個人的な快楽や欲望をはっきり否定しています。

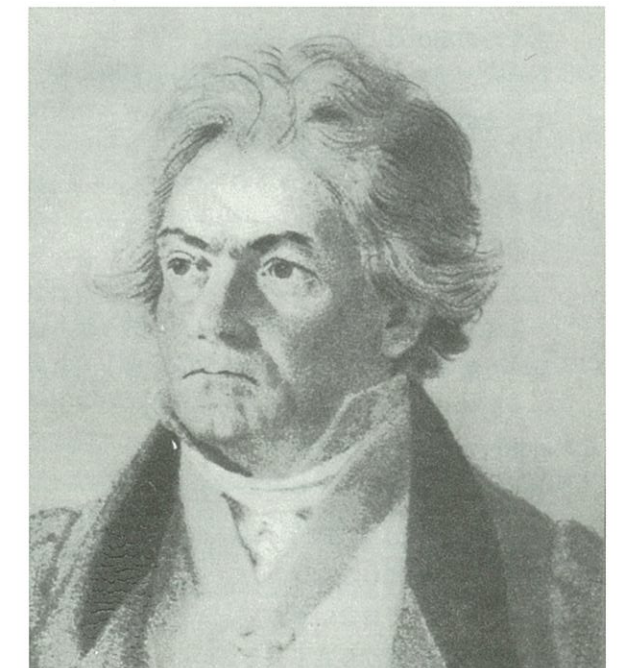
共通体験から生まれる感動 シラーの言う「歓喜」とは、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感を言うのでしょうか。一人の友と真の友人になった人、一人の優しい女性を勝ち得た人、その人の心が自分のものだと言える人—こう言った人々こそ「歓喜」を知った人たちです。この歓びの感情を知った人たちだけが、兄弟となるのです。鉄と鉄がガスや電気のバーナーで何千度にも熱せられると、どろどろと溶けだしてお互いがくっ付くように、普段は別々の興味や考えや心をもつ人たちでも、「子どもが生まれた」「大学に合格した」「ノーベル文学賞をもらった」となるとみんなが肩を抱き合って大喜びをします。なんであっても、なにか共通の喜びがあれば、それが火花となってすべての人の心を溶かし、思いを一つに結びつけるのです。すなわち、「歓喜」は「共通体験から生まれる感動」のことだと言っていいでしょう。本日のみなさまのように、1900年代最後の年を記

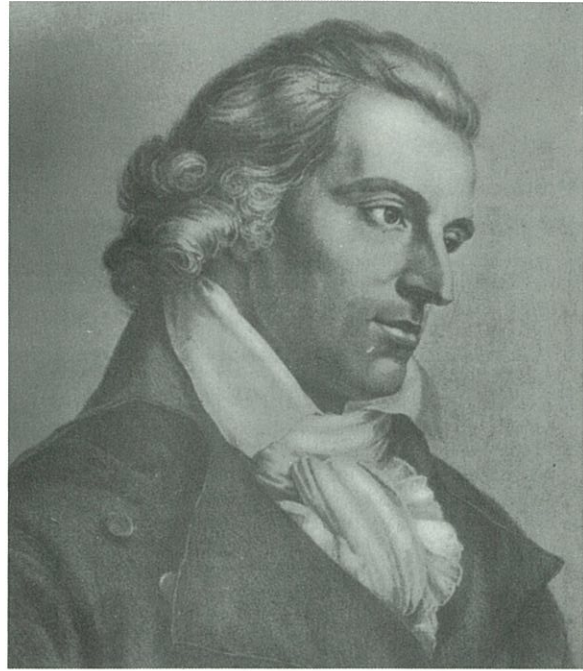
念するために、家族そろって「第九」を聴くのもこの「歓喜」を求めてのことだと思われます。

理想的な人類愛 さらに、「歓喜は、また、楽園からやってきた乙女だ。神々の火花によって、私たちが火のように酔うならば、そこで初めて歓喜の聖域に踏み込むことができるのだ」とシラーは歌います。「人類の心はもともと一つであったのだ。それが戦争や飢饉や恐慌や独裁といった時の流れで、いままでの友が新たな敵となり、仲間が仲間を殺したり嘲ったり軽蔑したりするようになったのだ」と。それほど激しく憎み合い、もう修復が効かなくなった関係であっても、「歓喜はまた再び私たちの心を結び合わせてくれる。これを魔法の力と言わずして何といおうか!」とシラーは人類の心の底に流れる歓喜の力を力説しているのです。もちろん、これはベートーヴェンのマニフェストでもあります。すなわち、個人を離れて理想的な人類愛をめざす、極めて精神的な満足感や充実感のことです。さらに、彼は言います。「歓喜とはなにか。それは、この世で幸せを見つけたことをいうのだ、例えば、真の友を得た人、優しい女性と結婚した人、だれかに確かに愛されていると感じる人こそ、歓喜を知る人なのだ。もしあなたが、このどれも知らないのなら、私たちの仲間になることはできない。涙を流して去っていきなさい」と。

さあ、私たちはこのシラーとベートーヴェンのメッセージに対してどう答えればいいのでしょうか。それを、本日の'99春日井市民の第九を聴きながら一緒に考えてみることにいたしましょう。

(音楽監督：都築正道)





歓喜に寄せる頌歌

A ベートーヴェンによるマニフェスト

ああ 友人たちよこのような音楽ではなく
 私たちをもっと楽しく歌わせ
 そして私たちが喜びで満たす音楽を奏でようでは
 ないか

B シラーの歓喜に寄せる頌歌

歓喜よ 美しい神々の火花よ
 楽園から来た乙女よ
 天国から来た者よ
 私たちは火のように興奮して
 あなたの神殿に昇る

あなたの魔力は 時の流れが厳しく
 分けへだてたものを 再び結びつけるのだ
 すべての人々は あなたの優しい翼が
 広がったところで兄弟になる
 抱き合え 百万の人よ！
 この口づけを全世界に贈れ！

一人の友の友となる大いなるサイコロの一振りに
 勝った者や
 一人の優しい女性を勝ち得た者は
 歓喜の声に唱和しなさい
 そうだ この地上で ただ一人でも
 「自分のものだ」と言える人は
 歓喜の声に唱和しなさい。
 そしてそれができないなら
 泣きながら仲間から立ち去るがいい

すべての生き物は自然の乳房に触れて歓喜を飲む
 すべて善き者も すべて悪しき者も
 歓喜の薔薇の足あとをたどっていく

歓喜は私たちにキスとブドウ酒と
 死ぬような辛酸をなめた友を与えてくれる
 享楽なんかウジ虫のような奴にくれてやるがいい
 そうすれば 私たちが死んだときに
 知恵の天使ケルビムは
 神の前に立って善良な私たちを神に紹介してくれ
 るだろう

百万の人よ 君たちは謙虚にひざまづいているか？
 世界の人々よ 君たちは創造主を予感しているか？
 星空の上に創造主を探し求めよ！
 星々のかなたに
 彼は住んでいるに違いない。

兄弟たちよ
 太陽が 天のきらびやかな軌道に乗って
 宇宙を動くようにあなたの道を進みなさい
 勝利に向かう英雄のように
 喜びにみちて進みなさい。
 (都築正道 翻案)



Schiller in Hoftracht. Scherenschnitt.

科学者としての演奏家

—音楽監督からのごあいさつ—

'99春日井市民第九演奏会音楽監督
 都築正道

公的で知的 平成11年の11月11日に文化フォーラム春日井がめでたく竣工しました。そのとき、この図書館と芸芸館を合わせ持つ建物から極めて強烈な印象をえました。その主なものは二つです。先ず文字通りパブリックな建物が実現したという感激です。子供も高齢者もハンディキャップの人も、あらゆる市民がだれでも参加できる構造になっているということです。公的な市の建物なので当然のことでありましょうが、それが実際に春日井市で実現できたことは大きな喜びです。もう一つは、極めて「知的な建物」であるという印象です。建物全体のデザインが、幾何学や数学や図学の基本となる正方形と長方形の組み合わせでできているからでしょう。これは「文化フォーラム春日井」にとって象徴的なことです。

文化検証の時代 これまでの「文化センター」の役割は、文化の多様性を尊重して、なんでもありの「異文化紹介」が中心でした。しかし、来るべき21世紀は、こういった「カルチャーショック」の時代を超えて、それぞれの文化を科学的に評価する「文化の検証」の時代であるべきです。そのためにも、21世紀を見据えた文化フォーラム春日井は、人文科学や社会科学だけではなく、自然科学もその対象にしていかなければなりません。そんなとき、この幾何学的に知的な文化フォーラム春日井の建物自身が、文化の中心に「科学」があることをいつも思い出させてくれるでしょう。

音楽も検証の時代 科学的な文化検証の時代にあって、現在の「音楽文化」も決して例外ではありません。検証すべきは、例えば、「カラオケ」と「だんご3兄弟」に見られるアマチュア主義と商業主義です。カラオケは、商業的にだれでも歌えるものでなくてはなりません。だれでも歌えるものである以上、和音も簡単で、メロディも単純で、歌詞も陳腐でなければなりません。多くの人に好まれ理解される歌であればあるほど、CDもDVDも楽譜もたくさん売れます。音楽批評家は、「そのことが自ら演歌の退廃を招いた」と憂えています。その極端な例が「だんご3兄弟ブーム」でしょう。ある日の朝刊に主婦の方の投書が載っていました。「私たちが家族そろって楽しんでいる『だんご3兄弟』を専門家が『あんな詰まらないもの』と文句をいっています。こんなにたくさんの人たちが喜んでるのにどうして専門家はケチをつけるのですか」というのです。

科学的な反省 さて、この文脈で「第九」の話をするのは極めて危険なことです。「それは私たちが

歌うだんご3兄弟よりも、あなたたちのベートーヴェンは高尚でしょうよ」という声が返ってくるに違いないからです。でも、クラシック音楽を高尚視する時代はすでに終わりました。いまや、ベートーヴェンなんか恐くないのです。恐いのは、ベートーヴェンのアマチュア化です。私たちは、毎年、同じベートーヴェンの「第九交響曲」を演奏しています。ベートーヴェンの音楽も、演奏を重ねていくと、次第に日本人特有の弛緩したテンポ感と無国籍な発音と都合の良い解釈と情緒的な歌い方に変えられていく危険が生じます。恐るべきは、「第九のカラオケ化」であり、「第九のだんご化」です。「第九」の科学的な検証が、ここでも必要とされます。「演奏家にあっても、真理に対する科学的な『反省』が問われているのだ」という声が、文化フォーラム春日井からこだまとなって聞こえてくるようです。

三人のウィーンの指揮者たち 春日井市民第九演奏会は、今年もまたウィーンから優れた指揮者を招くことができました。ウィーンからおいいただいた指揮者はこれで三人になります。一昨年のアレキサンダー・ドゥルカーさんの情熱的で職人的な指導には大いに驚嘆させられました。アマチュアのオーケストラと合唱団から、これほど多彩で高質な音楽を短時間で引き出してみせるそのプロフェッショナルな力量は、さすが名うてのウィーンのアマチュア指揮者です。昨年のエンルンスト・タイスさんの総合的で構築的な「第九」にもまた感嘆させられました。全楽章のテンポをお互いに関連つけていく構造的なテンポ設定に、これまでの第九指揮者にはなかった、大きなスケールの音楽を感じました。さて、今回のダニエル・ホーイェム・カヴァツァさんです。彼の練習を見ていて、情動的でダイナミックなのは賛嘆しました。この三人に共通しているのは、音楽に対する熱い情熱と真摯な謙虚さと正統的な解釈と優れた技術です。それはまた、私たちアマチュアにあっても、なくてかなわぬものです。

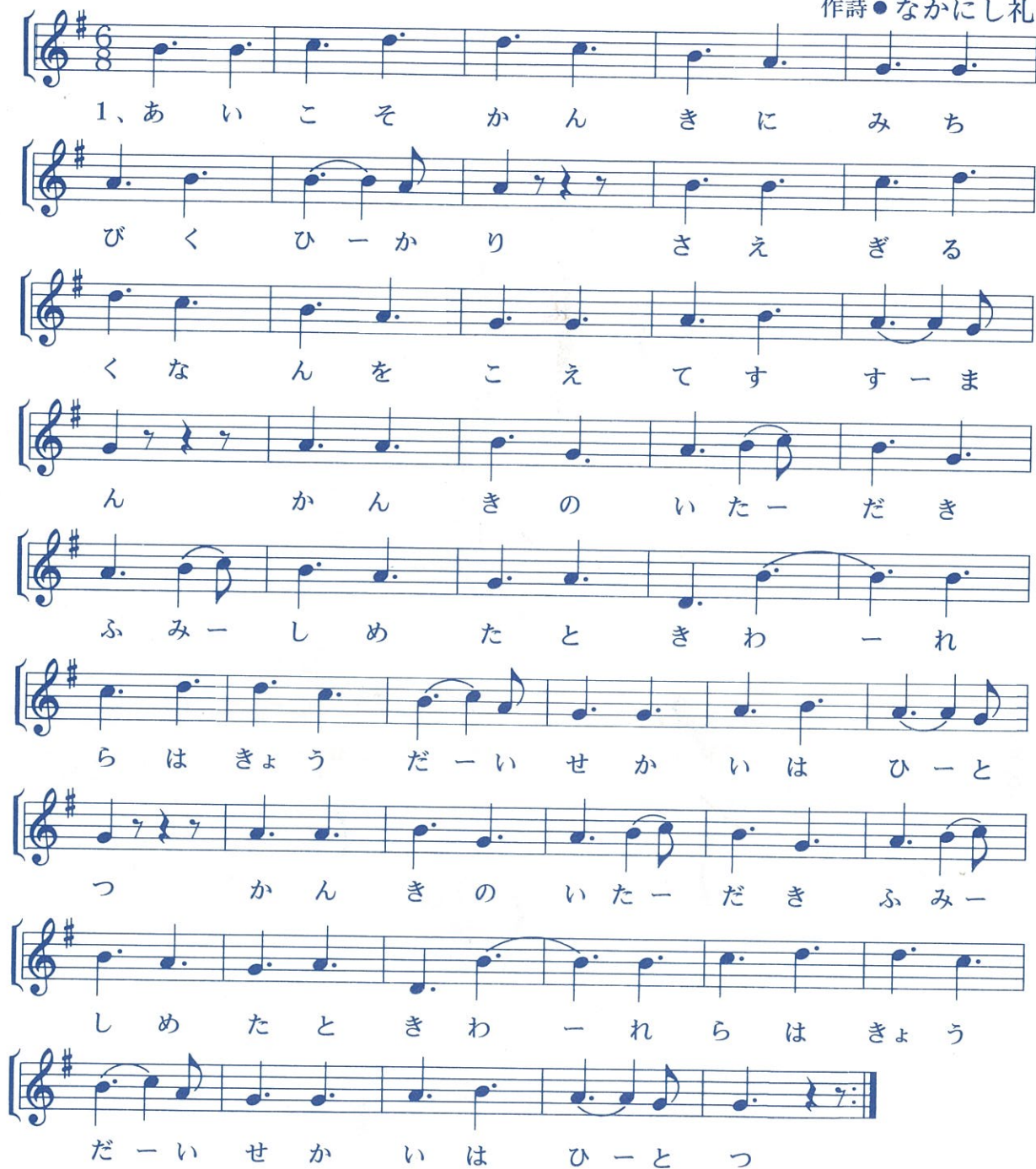
常に新鮮な「第九」を カヴァツァさんの指揮のテクニクは抜群です。小さな八分音符も、延ばすべき四分音符も、的確に指示してくれます。合唱団には、「ドイツ語の子音をもっとリズムカルに歌うように」と付点音符も振ってくれます。今年の合唱団のきれいなドイツ語の発音をご期待下さい。オーケストラには、出だしのアインザッツを常にプレスを入れて合図してくれます。オーケストラも、一斉にそろって大きな良く響く音を出せるというものです。今年のオーケストラの躍動感を大いにお楽しみ下さい。そして、合唱団とオーケストラと指揮者とソリストが一つになって、例年に増して新鮮な「春日井市民第九」を演奏するのを聴き下さい。むろん、これもまた、ベテランの合唱指揮者吉川朗さんとオーケストラの合奏指揮とコンサート・マスターをお願いした加藤莞二さんの預かって力のあるところでは

(音楽監督・都築正道)

みんなで歌おう、春日井賛歌を…

< 歓喜の歌 >

作詩●なかにし礼



1. あいこそ かんきに みち
びく ひかり さえぎる
くなんを こえて すすま
かんきの いたadaki
ふみしめたと きわめ
らはきょう だいせかい はひとつ
つかんきの いたadaki ふみしめ
しめたと きわめ らはきょう
だいせかい はひとつ

1. 愛こそ歓喜にみちびく光
さえぎる苦難を越えて進まん
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ
歓喜の頂き踏みしめた時
我らは兄弟世界は一つ

2. 気高き乙女を勝ち得たものよ
手を取り歓呼の叫びをあげよ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ
人間一人で何が出来よう
愛なき孤独の人は立ち去れ